日本財団カリキュラムプロジェクト

地域生活の視点で学ぶ重度身体障がい者の暮らし-

「地域で暮らす」を覗いてみよう-

NPO 法人境を越えて

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

目次

I.　はじめに 2
II.　活動報告 2
1.　会議録 2
第 1 回会議 2
第 2 回会議 3
第 3 回会議 5
第 4 回会議 7
第 5 回会議 9
第 6 回会議 11
第 7 回会議 12
補足 14
第 8 回会議 15
補足 16
第 9 回会議 17
補足 19
第 10 回会議 19
第 11 回会議 21
第 12 回会議 22
第 13 回会議 23
2.　カリキュラム実施結果 24
帝京平成大学 24
横浜リハビリテーション専門学校 25
東北文化学園大学 26
III.　まとめ 26

I.　はじめに

日本政府は今後の医療保険及び社会福祉政策として地域包括ケアシステムの構築を目標にしている。ゆえに在宅医療・福祉の人材育成が急務の課題である。一方で、保健・医療・福祉の専門教育課程における在宅医療・福祉を含めた多職種の連携や地域で暮らす当事者の実際を学ぶ機会は非常に乏しい。そこで本カリキュラムプロジェクトは、保健・医療・福祉の専門課程に在籍する学生に向けて、地域で暮らす重度身体障がい者の実際とそれを支える医療や福祉、介助に携わる専門職との関りを学ぶ機会を作ることを目指した。また、地域の視点で当事者の暮らしを理解する中で、障がいを社会モデルで探求できるようになることも目標としている。
チームメンバーは 10 回のミーティングと 7 回のコアミーティングを通して、カリキュラムを作成し、内外の評価者からの助言を得て修正を行った。作成したカリキュラムは帝京平成大学、横浜リハビリテーション専門学校、東北文化学園大学のそれぞれの医療系学生を対象に実施した。

II.　活動報告

1.　会議録

第 1 回会議

①　概要

2020 年 4 月 21 日
方法：ZOOM
参加者：海老原宏美,本間里美,千葉早耶香,郡司真樹子,吉田愛美,向山夏奈,吉澤卓馬,川村由里

②　内容要旨

カリキュラムの目標については、「多くの学生が重度障がい者のヘルパーになる」、「学生が障がい者の世界を知る」の 2 つのパターンが出た。各目標についてのメリット・デメリットを検討した。

③　詳細内容

・　目標パターン 1 ：多くの学生が重度障がい者のヘルパーになる

【学生にとってのメリット】
・重度訪問介護資格・第三号研修資格取得
・資格を活用したアルバイトが可能
・ヘルパーに興味のある学生にとっては、働いていたら単位が取得できる
【提供する側のメリット】
・人材確保

・当事者が育成に携わる場合エンパワメント向上
・基本的知識を習得してくれているので育成が少し楽？
・本当に興味を持った人が働いてくれる可能性あり（途中棄権者が減る）
【注意すべきこと】
・そもそもこの分野興味がある人が少なく、資格取得となるとより対象が狭くなる可能性
・魅力という点が限定的になる可能性（そもそも魅力ある人ばかりではない可能性）
・一般的な介護のイメージとは異なる点が協調できることが必要
・個別性を重視する必要性
・独り立ちの定義、数年をかけての計画が必要
・本講義を受講した学生が働ける場の提供

・　目標パターン２：学生が障がい者の世界を知る
【学生にとってのメリット】
・知らない世界を知られる（留学)、それで視野が広がる
・将来の選択の幅が広がる
【提供する側のメリット】
・間口を広く、重度に障がいを持った当事者を知ってもらえる
・人材確保につながる可能性あり
【注意すべきこと】
・魅力ある当事者ばかりではないという点をどう伝えるか
・事業目的である重度訪問介護のヘルパー育成には直接つながらない
・　パターン２について、考えられる講義内容
・ピアサポートの現場を体験する
・在宅で暮らす障がい者の生活をみて、体感してもらう
・障がい者とプロジェクト達成する
④　次回検討課題
授業目標や講義参加によるアピールポイントを考えるために、チームメンバーでそれぞれの経験を共有し、学生ヘルパーの魅力をまとめる。メンバーがそれぞれ学生ヘルパーとして働いていた理由を振り返る。

第２回会議
①　概要
2020 年 5 月 6 日
方法：ZOOM
参加者：海老原宏美,本間里美,千葉早耶香,郡司真樹子,吉田愛美,向山夏奈,吉澤卓馬,川村由里

② 内容要旨

もともと学生ヘルパーをしていたものや、現役で行っているものがこのバイトを続けていた（続けている）理由を共有した。また、多くの人が学生ヘルパーへ足を踏み入れてもらう工夫について経験をもとに発表し整理した。

③ 詳細内容

・ 学生ヘルパーをはじめた、続けていた（続けている）理由

・関わる当事者の魅力に引き込まれるから

・普段の生活では関わらない人に接して、新しい視点がもてるから

・自己肯定感が生まれたから

・新しい居場所となったから

・関わる当事者との関係性に価値をみいだしたから

・必要とされている感（その他大勢ではない）という感覚があるから

・ 多くの人が学生ヘルパーへ足を踏み入れてもらうための工夫

・当事者の介助者となる世界に興味をひく工夫

・当事者の魅力が伝わる工夫

・当事者だけではなく支える周囲の環境の魅力

・ 今の高等教育の不足とそれを補填できる介助経験

・コミュニケーション能力

そもそも会話や気持ちをくみとることができてはじめてスタートラインである

介護の中ではチームでのかかわりが多く、当事者だけではないコミュニケーションが大事

・創造性をもつ力

関わりを続けること（その人の考えていること、支えている周囲の動き、どのようなことが求められているか）から多様な考え方がみにつく

・自らの考えを発信する力

関わりが深くなればなるほど、ジレンマがうまれそれを考え発信することが介助には不可欠

本音で自分の考えを発信しないと、展開していかない問題に直面する機会は多い

・疑問をもつ力

受け身でなく、その人の気持ちを考えながらも主体的に動く必要性を求められる

・社会問題に意識を向けることができる力

当事者と過ごすことは、社会の中の問題が見え、考えるきっかけができる

・ カリキュラムの方向性の整理

基礎：今の高等教育で不足している部分に焦点をしぼり学べる講義

応用：医療、福祉系向けになる可能性があるが生活を視る視点が学べる講義

※どちらも参加型授業～実習とする

④ 次回検討課題

カリキュラムの方向性を考えるうえで、チームメンバー以外にも学生ヘルパーの経験ややりがいについて情報収集する必要性があることがわかったので、アンケート調査を実施することにした。また、カリキュラム内容を具体的に考えるために、実際に教育現場いる方に話を聞くことにした。

第 3 回会議

① 概要

2020 年 6 月 13 日

方法：ZOOM

参加者：海老原宏美,本間里美,千葉早耶香,郡司真樹子,吉田愛美,向山夏奈,吉澤卓馬,川村由里,岡部宏生,鈴木翔三

② 内容要旨

現役の学生ヘルパーと、元学生ヘルパーにアンケート調査を行った結果を共有した。カリキュラムの目標及び授業内容の概案について、実際に教育現場にいる外部の方(小学校・専門学校・大学の教員)へ情報収集を行い、共有した。長期及び短期の講義の構成について具体的に取り決めをした。

③ 詳細内容

・ アンケート結果

・回答数が思っていたよりも多い（48 名）ため、バイトを続けている人はこのバイトに意味を感じている人が多いと推察

・回答者の多くがＡＬＳ患者の介護者が主、かつ男性が少ない、途中で辞めたものは入っていないため、対象を広げて引き続きリサーチする必要がある

・回答者が実際に学生ヘルパーをしていた時から時間がたって、経験が美化されている可能性がある

・学生ヘルパーの問題点は今後、人集める中で大事な視点である

・問題点として拘束時間の長さや、ケア内容がシステム化されていないことがあるが、それらは早期に解決できるのではないか

・回答内容から、本カリキュラムの方向性は間違っていないことが明確になった

・ カリキュラムの目標

※大学ポリシー（アドミッション、カリキュラム、ディプローマ）に沿って表現する必要がある

・疾患を抱えた上で生活をする人、その支援を体感できる

・重度障がい者の生活の障壁を知り、乗り越える方法を考察できる

・自分自身の差別や偏見の視点に気づける

・社会問題へ意識が向く

・差別や偏見をなくすために必要なことを考えられる

・　カリキュラム内容の方向性
・広く浅く関心をもってもらえる内容
・クロスロードゲームは初級編から上級編にレベル分けしたほうが良い
・多様性に対応できる授業構成
・はじめのハードル、イメージ（呼吸器や疾患、障がいに対する恐怖感等）を払拭する構成
・広く浅い内容であっても、そこで興味もった学生は実際に学生ヘルパーとして働くことへつなげるようなものならさらにベスト
・「生活をしている人を支える」視点が理解できる
・社会問題（尊厳死や相模原事件等）への視点が考察できる
・今の社会の在り方への問題意識、その問題がある中で当事者の生活を支えること
・障がい当事者が超人的な活動家でなくても、支えたいと思わせるような説得の仕方
・障がいをもったときからいかに社会で排除されているかという視点
・利用者の人間力だって、当時者の社会経験がいかにあるかが大事でうまれてきてから排除されてしまった人にはそれがないことが伝わる
・様々な生き方をみていろんな生き方があって良いと思えたら良い
・　講義・実習方法案
・介助者をやった人がその経験を通してどうかわったのか伝える
・介助者の自己分析
・介助者が、介助経験をもとにして、考え方の変化があったか、またどのように変わったかを伝える
・いわゆる困難事例という人も介助者の人の声を聞く
・介助者の話を聞いてイメージや概要がわかってきたら、当事者のいる現場にでる
・社会モデルの理解を進める講義
・実際の現場に入れるカリキュラム
・夏季集中講座
　例）泊まり込み、キャンプファイヤー、当事者の日常を非日常どちらも感じられる内容構成、夜勤、ホームステイ、飲みにいく、遊びにいく
・　評価方法
・出席したら合格
・レポート提出したら合格
・課題をクリアしたら合格
　例）実際に当事者に声をかける、自ら介助探し、逆ヘルプマークつけて過ごす
・体験や経験したことを踏まえて政策提言を１つあげてもらう
・　授業構成
通常授業の場合
９０分授業×15 回＝1350 分＝22.5 時間

通常授業に実習を含む場合、数回分をまとめて実施することも可能

短期集中講座の場合
1 日目　座学　90 分
2 日目　体験　390 分＝6.5 時間
3 日目　体験　390 分＝6.5 時間
4 日目　体験　390 分＝6.5 時間
5 日目　ディスカッション　90 分
④　次回検討課題
具体的講義案を出し合い、内容精査を行う。また、授業の方向性についてメンバーで話し合う。

第 4 回会議

①　概要
2020 年 7 月 6 日
方法：ZOOM
参加者：海老原宏美,本間里美,千葉早耶香,郡司真樹子,吉田愛美,向山夏奈,吉澤卓馬,川村由里,岡部宏生,鈴木翔三
②　内容要旨
具体的な授業内容について、案を出し合った。授業の方向性は「障がいについて知ってもらう」「障がい者を通して自分自身を見つめてもらう」の 2 つに分かれた。それぞれの方向性はそれぞれに問題を含んでいる。「障がいを知る」が主軸では、障がいに興味のない学生を取り込めない可能性が高い。また、「自分自身を見つめる」講義はどの程度の学生にとって興味の対象となるかが不明であり、NPO 法人「境を越えて」としての活動の方向性と離れた内容になってしまう。
③　詳細内容
・　座学
i.　障がいの基礎知識
障がい、障がい者運動、社会モデル、障がい者権利条約、疾患
ii.　障がい者支援
社会資源、地域格差、障がい毎の格差、政策、インクルーシブ教育、介助者に必要な資格、コミュニケーション授業（文字盤、口文字、表情や合図を読み取る）
iii.　当事者について
当事者の生活、ピアサポートの存在、入所施設での体験、中途障がい当事者、死にたいと思っている当事者の生き方、障がい当事者の自己実現・当たり前の日常の実現、
iv.　介護者について
体験（講義や座談会）、

v.　平等と合理的配慮

・　ディスカッション

i.　当事者について

映画「こんな夜更けにバナナかよ」を鑑賞し、わがままな当事者の存在は本当にわがままと言っていいのか、生活の自己決定と自己責任

ii.　障がいについて

障がいに対する自意識、差別

iii.　クロスロードゲーム

実際の介護現場におけるジレンマ、事例検討

iv.　社会問題について

相模原事件、新型コロナウイルス感染症にり患した者のトリアージ、出生前診断、尊厳死法案

v.　講義を選択した理由

vi.　学外実習を経て感じたこと

感想、社会モデルの観点からとらえる

・　学内実習の内容

i.　当事者に接する

体に触れる、コミュニケーション（文字盤や口文字）の実施、声のでない当事者との関り

ii.　介護体験

クロスロードゲーム、古武術介護

iii.　障がい体験

当事者体験（声を出さないでなにかやる、車椅子に乗って道路を歩く)、口文字のできる人の集団の中に入る(構成概念によって障がいは生まれることの理解)

・　学外実習

i.　現場見学

大学の近隣で外出の同行、音楽フェスへ同行、（夏休みを利用して）花火大会や宿泊、訪問介護

ii.　計画の実施

学生が目標を決めて実際に外出するための計画をするところから実施

iii.　身体障がいだけでなく知的障がいの人の支援

・　その他のこだわり

社会人基礎力を身に着ける

当事者との関係性を深められるように１対１になる
資格取得
自分自身を見つめる、社会の中で自分も抑圧されていることに気付かせる
社会を変えてきた障がい者の存在を知ることで自分も社会を変えられると思ってもらう
答えを出さない授業
学生が取り組みやすい下地づくり、身近な話題から考えてもらう
介護という事を知ってもらうと共に障がいを通して社会について考えるきっかけにしてくれるようなものになって欲しい
授業を受ける中で真剣に興味をもって学習を進めることを支援するつかみや下地作りに工夫する

・　評価方法
出席数
基礎知識に関する試験
レポート
政策提言
・　短期講座
当事者の生活範囲でミッションを実施
日勤・夜勤を体験
資格取得を目指す
④　次回検討課題
講義の方向性がそれぞれのメンバーで大きく 2 つに分かれたため、どのような内容にするべきかを、外部評価者を交えて再検討する必要がある。

第 5 回会議
①　概要
2020 年 7 月 16 日
方法：ZOOM
参加者：千葉早耶香,吉田愛美,吉澤卓馬,川村由里,岡部宏生,鈴木翔三
②　内容要旨
講義の目標は、学生が重度の障がいや介護について知ることと、障がいを通して社会背景や問題を考えるきっかけを作ること。その上で、講義を選択するメリットを提示することも大事。メリットになるのは「自分とは何か」「自分も障がい者かもしれない」「障がいって何？」を考えられるということ。それらの目標をうまく組み込んだ講義を、今まで出てきた案をもとにして再度検討していく必要がある。
③　詳細内容

・　講義の方向性

学習機会の少ない、障がいや介護について理解してもらう機会をカリキュラムに組み込むことでつくり、学んだ学生の中に介護に興味を持ってくれる人がいれば良い。まずは、学生が重度の障がいを知る機会を作って、そのうえで、実際に現場に入りたいと考える人が出てくることも理想

「自分を見つめる」「障がいを作る社会」「自己実現」を探求する講義も面白いが、それはプラスアルファの要素にする

障がい者のことと介護について知ってもらうということと、介護について興味を持ってくれたらなおよいということ。プラス社会について考えるきっかけになってくれたら、ということ

障がいや介護を知る一歩目とする

・　講義

1.　障がいを伝える

学生が障がいや在宅の介護について知り、より興味を持ってもらうためのカリキュラム

重度の障がい者の介護のことを知ってもらってできれば体験もしてもらい、のことを中心にして。それに社会的な背景とか社会的な課題にもふれられたらよい。

当事者体験をするにしても、新しい発見を体験する学びの機会にする必要がある。障がいを持っていることによる疎外感を持つ経験、感情を想起する。構成概念によって障がいが生まれるということを伝える。文字盤ができる集団で、できないのは、障がいだということがまさにそれの体験。

答えを求める学生に対して、考えることの大切さを伝える機会にしたい。当事者のところで正解がないことを自分で考えることを鍛える機会、クロスロードゲームの活用をする支援者や当事者の生の声、エピソード、経験をして、体験をして、感じたことを話し合う、というのをいろいろな当事者で行う。もしくは、なにも前提条件のない状態で、体験を最初に持ってくる。当事者と一対一になって、何を気付くことができるか、また、当事者の人がしているコミュニケーションを見て、何を考えたかを発表してもらう。それをフィードバック。

単にスキルを伝える授業ではない

介護については重度の障がい者の介護について、「境を越えて」でまとめているものを伝える。

障がい者を知ってもらうことについて、障がいは構成概念が作り出すものなので、障がい者の何を知ってもらうかまさにこちらで選択することなのでみんなで考えてほしい

2.　社会学

「自分を見つめる」がテーマの講義は興味のない学生にとってはマニアックで難しい。

普通の学生向けには逆に体験をきっかけにして社会学に寄ったカリキュラムを作ればよい

例えば「自分とは何か」、「自分も障がい者かもしれない」というように、遠いところにあっ

た障がいという問題をもっと近くに考えてもらう。そこから入って、体験とか支援者の話とか、みんなの出してくれた具体的な案をぶっこむ。シラバスを読んで取りたくなるようなものにしないといけない。だから騙すじゃないけど受け終わったら、最初の問題の答えはそういえば得られてないけど、なんか色々体験して、考えるきっかけや材料は手に入れた気がするなみたいな。

・　その他

例えば、車いすに乗るなら、実際の道を押してもらうとなんてデコボコなんだよ。ということを感じて社会のことと障がい者の生活に目を向けてもらうことが体験の目的。このように目的にリンクしたカリキュラムにしたい。

仙人ヘルパーに共通しているのはスタンスもスキルもあった上で介護で生きているということ。単に仕事だということ越えてやっている。その存在を伝えるということは、社会で自分はどう生きるか、どこでそういうプロとして働くか、そういうことを考えるのにつながる。

第 6 回会議

①　概要

2020 年 10 月 1 日

方法：ZOOM

参加者：海老原宏美,本間里美,千葉早耶香

②　内容要旨

カリキュラムの対象は医療・福祉・介護系の学生に絞り、短期集中講座(座学 3 日＋研修 2 日)とする。以下の 3 点を要旨とする。①重度障がいを持ちつつ在宅で生活している当事者の現状を伝える体験、②障がいについての基礎知識や障がいの社会モデルを伝える③障がいを取り巻く現状を知ったうえで、自分や社会を見つめるきっかけを作る。上記を通して学生が考える力を養う支援をする。目標は「自分」と「障がい者」という分断されている考え(境)を越えてもらうこと。

③　詳細内容

・　カリキュラムの具体案

対象者を医療や福祉を学ぶ学生に絞って作成する。実現可能性を考えて座学 3 日、実習 2 日の短期集中講座とする。開催時期は学校の各休暇期間とする。実習の受け入れを考えると、当事者 1 人に対して 2 人の学生が限界なので、カリキュラムの定員は 10 人程度。

・　短期集中講座案

1 日目テーマ：つかみ

講師：岡部、海老原、本間、吉澤、向山

内容：当事者の生活紹介、元学生ヘルパーの経験談、障がい者総合支援法、重度障がい

を支える公的制度、ヘルパー、費用、疾患
2 日目テーマ：深める
講師：海老原
内容：障がい者が地域に暮らしていることの意味を考えさせる。学生自身が自分も障がい者なのではないか、と考えてもらう視点をもってもらう。海老原さんの本（『わたしが障がい者じゃなくなる日』）を参考に、障がいの社会モデルの話をする。「障がいってなに？」を学生に問いかける。
※3，4 日目で演習する当事者の紹介：疾患や制度ではなく本人の紹介
３，４日目　実習
内容：各家庭で 1 泊 2 日の実習(生活体験)をする。当事者とコミュニケーションをとらないとできない介助を課題とする。当事者が指導者となってミッション達成を目指す。EX)買い物に行ってご飯を作る、生活の中でのコミュニケーション、実際に体に触れる体験。
講義の中で学生に生じた疑問へ回答(疑問に対して答えがでるように意識して演習を進める)。それに加えて 3・4 日目の演習の中で感じた疑問を出させて、考えてもらう。実習前にフォーマットを渡す必要がある。
5 日目 テーマ：まとめ・振り返り
内容：「当事者の生活で印象に残ったこと」「介助者がしていたことで印象に残ったこと」「社会、外部の人たちは当事者に対してどのような反応をするか」を学生同士で共有する。事前に渡したフォーマットをもとにして発表・座談会を実施する。
最後に介助者や学生ヘルパーの話をもう一度共有する。学生ヘルパーの宣伝も一緒に行う。

・ (学期を使った)講義について
対象者が少ないとカリキュラムにならない。少なくとも 30 人程度を対象にした内容でないといけない。そうすると見学体験は無理なので当事者に大学へ来てもらって、グループでディスカッションしてもらう形式になる。

・ 今後の予定
今年中には、カリキュラムを作って提携先大学を決める（最低でも 2 校)。専門学校も対象に含める。外部評価者にカリキュラムを見てもらってから大学をあたる。
学生ヘルパー対象のアンケートをまとめて冊子にしたい。
演習受け入れ先にも謝金を支払う。
保険(演習時の)　学生ヘルパーの入っているボランティア保険(単発)に入ってもらう。保険に関しては大学に確認が必要。

第 7 回会議

① 概要
2020 年 12 月 2 日

方法：ZOOM

参加者：本間里美,千葉早耶香,向山夏奈,吉澤卓馬

② 内容要旨

カリキュラムのポリシーの内容について現在の講義内容では医療福祉系の学生が地域で暮らす重度障がいを持つ当事者の生活について理解する視点が欠けているため、文言を変更する必要がある。講義内容は当事者が学校に来ての講義を追加する案が出た。また、実習の想定を 24 時間（1 泊 2 日）としていたが身体・精神面での負担が大きいため、夏季休暇の期間内で日勤、夜勤を経験できる内容に変更できないか調整の必要がある。講義で使用するテキストの作成をすることになった。

③ 詳細内容

・ 講義名

学生にとってわかりやすいように「介助の視点で学ぶ、重度障がいのある当事者の地域生活」を先に記載する。

・ ポリシー

アドミッションポリシー：介助技術を学ぶという点も追記している。「境を越えて」が伝わるような工夫を。

ディプロマポリシー：「在宅生活」にこだわると在宅ではなくても地域で暮らす当事者の存在と離れてしまうので、「地域生活」という表記にした。講義の根底にあるメッセージは、介助や重度の障がいがある当事者の生活を知ることで“境は越えられる”こと。学生にとっては資格取得の表記は魅力的に映るのではないかと考えたが、何も知らない状況でそれだけ書いてあってもかえってわかりにくい可能性があるので講義の中で紹介する形にする。

今の内容では、なぜこの講義を取るべきか、なぜ病院ではいけないのかという視点に欠けている。一般的な実習で触れている患者と、地域で暮らす当事者との違いが分かるようになるという文言も必要。

地域生活を理解することのメリットとは「病院で働く中で患者が自宅退院を目指す場合の懸け橋になっている」こと。制度などの使い方の具体的なイメージがある程度できていることが強みである。患者や家族に指導をするときに、病院のやり方だけが正解ではないと伝えられる。

「当事者を多角的・包括的な視点を養うことができる。」「その人らしい生活を支える包括的なケアを学べる。」「地域共生社会への架け橋となる」などの意見も出たが、この文言は境を越えてのオリジナリティを薄めてしまうので、外部評価者の意見も参照。

・ 講義内容について

i.1 日目

1 コマ目で当事者の生活を“制度、訪問入浴、訪問看護、生活資金の稼ぎ方まで”知る。動画を使用して眠くならない工夫をする。 2 コマ目で学生ヘルパー経験談を具体的に

伝える。3，4 コマ目で学校では教えてくれない制度の細かいところ。5 コマ目は重度訪問介護を使えるのは知的・精神疾患もだが、境を越えてとしては重度の身体障がい＋医療ケアなので、そこに焦点化する。

ii.2 日目

海老原さん主体で「障がいってなに？」の講義をする。実習をする当事者の生活紹介は PPT の方が、当事者の負担は少ないが、学生が実習内での問いを考えやすいのは動画かもしれないので、何で紹介をするかは要検討。実際に当事者に来てもらって話をする案もあった。

iii.実習

24 時間実習はきついのでやめるべき。ヘルパー経験者は分かると思うけど、初めて当事者の生活を見学するときは身体的・精神的にもかなり疲労するので厳しいと思う。夜勤を入れるにしても見守りだけ行っている人や、一晩中眠れないようなところもあるので当事者の検討が必要。1 日目，2 日目，5 日目の講義の日程だけを固定して、実習期間は余裕を持たせて設定しておき、後は学生と当事者に調整してもらう。そうすると、受け入れる方の数も少なくて済む。

有事の際のための保険と同意書の作成は依頼する。

iv.5 日目

学生ヘルパーの紹介は簡単に実施。興味のある学生が資格取得やアルバイトにつながるように支援。

v.成績

当事者にミッションを提示してもらうので成績評価をしていただいても良い。実習期間にゆとりがあればそこまでの負担にはならないのではないか。

・ テキスト

今後も継続して使えるような内容にしたい。現代書館に関わってもらうか確認。疾患に関しては病態生理を伝えるというよりも一般的な教科書では伝えられていないことを記載する。(ALS の情動静止困難についてなど)。医療的ケアについても記載。当事者にヒアリングが必要。

補足

これまでのﾐｰﾃｨﾝｸﾞの内容を受けて特定のメンバーでコアミーティングを実施した。

第 1 回コアミーティング

2020 年 12 月 19 日

参加者：本間里美、千葉早耶香

内容：テキストの内容について話し合った。当事者の生活を紹介しつつ多職種との連携や地域の制度の紹介を行う部分に加えて、具体的なコミュニケーションの方法や疾患理解を深める内容にする。また、それぞれの講義の講師の分担について話し合った。疾患の理解を深める部分の講義について必要な内容を話し合った。

第 2 回コアミーティング

2021 年 1 月 16 日

参加者：本間里美、千葉早耶香

疾患理解を深める講義の内容を考えている中で、カリキュラムに介助者の視点を入れる必要性があるという結論になった。このタイミングで介助者の代表として江口健司氏に協力を依頼し、テキスト作成と当日の講義担当となった。

第 3 回コアミーティング

2021 年 1 月 17 日

参加者：本間里美、江口健司

介助の部分に関してカリキュラムの内容を一部変更する必要があったため、担当者と調整を行った。

第 4 回コアミーティング

2021 年 3 月 24 日

参加者；本間里美、海老原宏美

翌日に実施する全体会議に向けて、次年度以降のスケジュール(テキスト完成期限など)を調整した。また、再度カリキュラムの方向性を確認した。

第 8 回会議

① 概要

2021 年 3 月 25 日

方法：ZOOM

参加者：海老原宏美,本間里美,千葉早耶香,郡司真樹子,吉田愛美,向山夏奈,吉澤卓馬,川村由里

② 内容要旨

2021 年度の活動スケジュールを確認した。

2021 年 8 月にモデル校でのカリキュラム実施が決定したため、それに向けたカリキュラムの詳細及びテキスト内容について確認した。

③ 詳細内容

・ 2021 年度の活動スケジュール確認

3 月中にテキスト作成(たたき台)なので、5 月までには完成を目指す。帝京平成大学と横浜リハビリテーション専門学校は今年の 8 月、東北文化学園大学は来年春ごろに開講予定。

・ カリキュラム及びテキスト内容・方向性の確認

1 日目

「地域で暮らす重度身体障がい者の暮らし(岡部)」

「医療編」(本間)

病院を知らない人へ伝えるので、比較というよりも在宅のことを直接伝える内容にす

る。コミュニケーションの内容は 2 日目講義と内容が被るため削る。密度が濃いので医療面に限定してより深く説明する。失敗談のような実例は学びやすいので入れ込む。

「地域編」(海老原)

内容が難解なのでより分かりやすくするために説明を加える。障がい者総合支援法の体系図等。各スライドにストーリー(法律ができた経緯)を追加する。

2 日目：

「介護と介助(江口)」

内容はとても良いので PPT の見せ方として写真などを追加してわかりやすくしてもらう。

「疾患基礎(千葉)」

難病の説明というよりも、治療を目的にしているわけではない人たちの話をするという説明を追加する。解剖生理は一般論なので、疾患ごとにどこが障がいされるかを図式化する。

「疾患あれこれ介助編(江口)」

介助をしたことのない学生でも想像しやすいように具体的なエピソード集として、動画などを作成する。

「経験談(吉澤)」

コミュニケーションは体験してもらう。学生ヘルパーを始めた経緯と、実際に現場に入って気付いたことを追加。学生ヘルパー経験(学校では知れないこと)を各スライドに追加。

※経験談は 5 日目へ移動

3・4 日目体験

5 日目

「障がいって何だろう？(海老原)」

地域で生活することを支える上で最も基盤の内容なので 1 日目の授業の導入で触れる。

前半：海老原さんが自立するまでの生活と障がい権利条約・社会モデルまで

後半：インクルーシブ

「ディスカッション(向山)」

全員の経験談を振り返り、現役学生ヘルパーとディスカッションする。

テキスト化する際の構成は相談

出来上がった内容を、介護・看護の経験および大学で講義をしたことのある人に共有して助言してもらう。

補足

第 5 回コアミーティング

2021 年 5 月 17 日

参加者は本間里美、海老原宏美

テキストの大部分が完成したため冊子としてまとめる方法などについて話し合った。最終的には向山さんに相談し、内容の最終チェックと校正、入稿、発注を依頼することになった。

第 9 回会議

① 概要

2021 年 6 月 17 日

方法：ZOOM

参加者：海老原宏美,本間里美,千葉早耶香,郡司真樹子,吉田愛美,向山夏奈,吉澤卓馬,川村由里,桜井こずえ

② 内容要旨

帝京平成大学でのカリキュラム実施が決定したので、講義の時間割や見学体験をする上での注意点などを話し合った。テキスト作成に関しては 6 月中に内容チェック、7 月初旬に講師陣へ配送の計画になった。

③ 詳細内容

・実習・体験について

マナーチェックシートで具体的な注意を記載する。当事者紹介はフェイスシートを作成する。当事者自身が実習生に伝えたい心構えを追記してもらう必要があるので当事者の方へ依頼する。海老原さんの考える心構えの例はテキストにも記載する

・帝京平成大学看護学部　1 年生対象の講義内容について

19 名の参加が決定した。女子学生の割合が多いので、実習先の当事者の方へ説明が必要。2 人一組で見学体験を 2 日間実施する。実習先の当事者の候補は 8 人ないし 10 人程度を目標に相談。ミッションの内容は、近所で買い物や料理、文字盤などの特殊なコミュニケーションの実施を検討している。当事者が体調不良になった場合に対応できる人が必要。学生は 1 年生で実習経験に乏しく教員の同伴もないため、フォロー体制を作っておく必要がある。

・スケジュール案

(1 日目)

10：00～11：00　「あなたが考える障がいとは？」岡部：地域で暮らす重度障がい者、どんな生活？

11：00～12：00　昼休み

12：00～14：00　本間：地域で暮らす社会の仕組み　医療編

14:10～16:10 海老原：地域で暮らす社会の仕組み　福祉編

(2 日目)

9：00～10：00　江口：介護と介助何が違うの？地域で暮らす当事者を支える介助の視点

10：10~11：40　千葉：これだけは押さえておこう、疾患のあれこれ医療編
11：50～12：50　昼休み
12：50～13：50　江口：これだけは押さえておこう、疾患のあれこれ介助編
14：00～15：30　吉澤：コミュニケーション
15：40～16：40　実習準備（①フェイスシートで当事者紹介②質問を考える③心構え④マナーチェック⑤同意書）
(3・4 日目)
6 月 18 日～23 日
実習時間の最終確認が必要：6 時間×2 日もしくは 12 時間×1 日？
当事者の方によっては 1 日間が望ましい
(5 日目)
10：00～10：30　記録「あなたが考える障がいとは？」
10：30～11：30　海老原：
11：30～12：00　昼休み
12：00～13：00 グループワーク 5 人一組で経験の共有と「障がいとは？」を話し合いファシリテーターを各グループへ置く
13：10～14：00　向山：グループワークの発表
14：10～14：40 吉澤：経験談　(2 日分スケジュール確保可能)

・当日渡す資料について
テキスト
講師陣ファイル
実習準備の資料（フェイスシート、ワークシート、心構え、マナーチェック、同意書、行事保険の資料）
・今後の予定
講義の練習

以下の通り、計 5 日間講義練習を行った。
練習①
2021 年 7 月 12 日
参加者：海老原宏美,本間里美,千葉早耶香,吉澤卓馬,川村由里,桜井こずえ
内容：吉澤担当「コミュニケーション」「学生ヘルパー経験談」
練習②
2021 年 7 月 15 日
参加者：海老原宏美,本間里美,千葉早耶香,吉澤卓馬,向山夏奈,桜井こずえ
内容：千葉担当「これだけは押さえておこう、疾患のあれこれ医療編」
練習③

2021 年 7 月 20 日
参加者：海老原宏美,本間里美,千葉早耶香,吉澤卓馬,川村由里, 向山夏奈,桜井こずえ
内容：江口担当「介護と介助何が違うの？地域で暮らす当事者を支える介助の視点」「これだけは押さえておこう、疾患のあれこれ介助編」
練習④
2021 年 7 月 21 日
参加者：海老原宏美,本間里美,千葉早耶香,吉澤卓馬,岡部宏生,桜井こずえ
内容：海老原担当「地域で暮らす社会の仕組み　福祉編」「障がいって何？」
練習⑤
2021 年 7 月 22 日
参加者：海老原宏美,本間里美,千葉早耶香,岡部宏生, ,川村由里, 向山夏奈,桜井こずえ
内容：本間・岡部担当「地域で暮らす重度障がい者、どんな生活？」「地域で暮らす社会の仕組み　医療編」

補足
第 6 回コアミーティング
2021 年 7 月 1 日
参加者：本間里美、千葉早耶香
内容：カリキュラムの見学体験部分に関しての具体策の調整と実習記録の作成に際しての話し合いを行った。
第 7 回コアミーティング
2021 年 7 月 13 日
参加者：本間里美,海老原宏美
内容：8 月の帝京平成大学でのカリキュラム実施に向けて時間割や学生に入ってもらう保険などについて話し合った。
第 10 回会議
① 概要
2021 年 11 月 12 日
方法：ZOOM
参加者：海老原宏美,本間里美,千葉早耶香,吉澤卓馬,川村由里,桜井こずえ
② 内容要旨
2022 年 3 月末に実施する東北文化学園大学での講義について、今後の計画を共有した。また次年度以降の取り組みについてはプロジェクトを全国的に波及させるための活動や大学以外を対象としたモデルカリキュラムの実施の予定について情報共有した。
③ 詳細内容
・ 今後の計画の確認

内容は帝京平成大学で行ったのと同様の講義で、対象は看護学部・PT・ＯＴ・社会福祉士・臨床検査技師などで 20 名を定員としている。参加学生は 12 月末までに確定する。
講義 1 日目は、小田瞳さん(リモートでの参加)と長田直也さん(現地)に依頼。
2 日目のコミュニケーションの講義は当事者の方が参加できるように調整する。可能なら現地にいる方にお願いしたいが、難しそうなら岡部さんに来てもらう。
2 日目の講義について、講師の吉澤が 2 日までの参加になるので 5 日目に実施していた講義は 2 日目にまとめる。
見学体験時の巡回について、当事者宅の間が遠いので巡回できるスタッフは多めに確保。（本間、桜井、千葉、川村、山崎、阿形）

- 今年度の活動の共有
  結果として参加学生の満足度は高く、帝京平成大学に関しては参加した学生の 4 割が学生ヘルパーをすることになるという副次的な効果もあった。今後は波及のための取り組みが必要になる。
- 来年度からの活動予定概要
  講師、見学体験受け入れ当事者増員のための説明会と勉強会の開催。プロジェクトを波及させる上で質を維持するために行う。
- 5 か所でモデルカリキュラムの実施
  対象は保育園から大学。今実施している医療系学生への講義を基盤として、最終的には障がいとは何かまで考えられるような内容の授業を多岐にわたって実施していく。
- カリキュラムの開催のノウハウのパッケージ化
  現在は PPT をテキストにしているので、その内容を書籍化、講義時の教則本の作成も同時に行う。
- 今後の活動に関する役割分担
  成果報告書の作成や今までの MTG 議事録のまとめは千葉が担当。テキストの修正は個々で実施し、3 月の東北文化学園大学での実施に向けて完成させる。
- カリキュラムの内容について改善案を検討
  2 日目に実施している医療・介護の視点について事例ベースのものへ変更することを検討。
  例）見学・体験受け入れをしている当事者を事例にする。フェイスシートと SEIQoL-DW を出して、多職種(介助者、看護師、PT、OT、社会福祉士、医師等)の視点でどのように対象を捉えているかを伝える。学生にもそれぞれ今持っている知識をもとにして考えてもらう。最終的に当事者の方にそれを聞いてどう思ったか、実際はどのようにいるかを教えてもらう。
  学生に自分の想像では「間違っていた」「想像しきれない部分があった」と感じてもらうような講義を作る。

第 11 回会議

① 概要

2021 年 12 月 17 日

方法：ZOOM

参加者：本間里美,千葉早耶香,向山夏奈,吉澤卓馬,江口健司,長田直也,小田瞳,高野元,桜井こずえ

② 内容要旨

2022 年 3 月末に実施する東北文化学園大学での講義について、スケジュール、講義内容の修正、担当者割り振りをした。また次年度以降に実施する新しいカリキュラム案を検討した。

③ 詳細内容

・ 東北文化学園大学での講義について

1. 今後のスケジュール

   2022 年 1 月末までに(新しく担当が変わった部分を含めて)テキスト完成。1 月中に長田さん小田瞳さんの講義練習会実施、これを受けてテキストの修正を行う。今年度の講義の内容も必要があれば修正して向山さんへ再提出し、2 月中に印刷する。

2. 吉澤担当部分の講義について

   2 日目：コミュニケーションと 5 日目に実施していた介助の話(姿勢や動画の部分など)を統合

   5 日目：学生ヘルパーとしての経験談と今にどう生きているかの話を千葉が作成して提出。

3. 1 日目の海老原担当部分の講義について

   割り振り：“mission1:住む mission2 お金 mission4 車いす mission5 外出 mission6 暮らす”→長田、mission3 生活快適→小田瞳.

   「地域で自立生活を送ろうとしたきっかけ」を含む内容でそれぞれの自己紹介ページを追加。

・ 新カリキュラム案

   カリキュラムの目的は「在宅医療、福祉の充実に貢献できる人材を育成すること」であり、これを主軸にして新たなカリキュラムを作成していく。見学体験の前後での学生の準備段階を考慮して検討する必要がある。

1. 追加する必要がある内容

   地域と病院の連携、医師の視点：海老原さんや小田さんの実体験も参考にする

   多職種連携について内容を深める：核になるのは本人の思いだということ

   連携するための多職種での情報共有について：介助の視点の紹介に加えて、多職種講師陣によるモデルカンファレンスの実施を検討

   当事者の思いと支援者たちの思いのギャップ、当事者中心とはなにか：当事者から多職種連携への思いを伝える

SEIQOL-DW について：概要と具体例の提示
本人の思いを聞くための関わり方：それぞれの経験談の紹介、見学体験とのつながりも意識する

2. 現在の講義内容から見直すこと
「本人を中心にする」とはどういうことかが伝わる講義の構成を根本から考える。カリキュラム自体の目標を具体化し、それを受けて講義や見学体験の位置付け、目的や目標を再考する。

3. 今後の課題
1 月末までに東北文化学園大学の講義で使用するテキストの修正を終える。あたらしいカリキュラムの構成を再検討する。

第 12 回会議

① 概要

2022 年 2 月 5 日 14：00-17：00

方法：ZOOM

参加者：本間里美,千葉早耶香,向山夏奈,吉澤卓馬,小田瞳,長田直也,桜井こずえ,江口健司

② 内容要旨

2022 年 3 月末に実施する東北文化学園大学での講義について、見学体験に協力くださる方の情報共有、3・4 日目の講義内容の修正、参加日・宿泊日の確認をした。また今回から参加の長田、小田の講義練習をした。

③ 詳細内容

・ 3 月開催の東北文化学園大について
協力いただける当事者について情報共有→当事者の方によっては重度訪問介護を使っていないケースもあるため、講義時に説明する
地方のため都心とは異なり介助者が集まらない、使える制度が異なるなどの状況の違いがあるという点も説明できると良い

・ 見学体験の日程(3・4 日目)について
実習を 1 日に減らすため、もう一日を①「風は生きよという」鑑賞とディスカッション、②コミュニケーションについての講義(吉澤担当)と演習、③コミュニケーション機器体験(安西さん)、④学生ヘルパーの経験談、へ変更。来週中に詳細を担当者で調整

・ 参加日、宿泊日の確認

・ 長田、小田の講義練習
2 人で 1 時間 20 分程度

1. 長田さん担当部分の修正点：
「あなたが何者かわからなかったら？」部分を学生にわかりやすいように変更
お風呂の話
実家暮らしのデメリットを伝える際の主語を明確にする

5 日目の講義はリモート長田、現場向山担当。資料は前回講義と同様のものを使用する。

2. 小田担当部分の修正点：

冒頭に自己紹介を追加

9 か月ぶりに神社に行けたときの写真を追加

口頭で説明している内容の中でも重要な部分を文章にしてスライドに落とし込む

（小田さんの健康相談の活動、文章を握りしめて交渉した話）

長田さん講義で経済面の話を伝えているので、そこと関連させてベッドの話等金銭的な話を具体的に

オリヒメの説明を追加

車椅子のレンタルは介護保険でないと使えない等、制度上の障壁を強調する

・ 時間割、講師紹介ページの変更

学生ヘルパーの経験が現職に与えた影響については、いろいろな学部の学生がいるので、吉澤 3，4 日目講義のまとめと千葉 5 日目の最後の講義で扱う。

・ 新カリプロ案について共有

・ 今後の予定

来年度は新カリプロ案を実施して教則本を作成するまでを目標にする。ここで今後のカリキュラムの内容を本決定して、次年度からの 3 か年計画の初年度にテキスト作成を行う。

第 13 回会議

① 概要

2022 年 3 月 17 日 21：00-23：00

方法：ZOOM

参加者：本間里美,千葉早耶香,向山夏奈,吉澤卓馬,川村由里,長田直也,桜井こずえ,江口健司

② 内容要旨

2022 年 3 月末に実施する東北文化学園大学での講義について、時間割と担当箇所、テキスト作成の進捗状況、来年度スケジュールの確認をした。また、来年度以降のカリキュラム案について検討した。

③ 詳細内容

・ 仙台の時間割・役割分担最終共有

看護学部の学生の 4 日目の講義が 14:45~18:50 に変更

吉澤→4 日目午前中に 1 件訪問：状況櫻井より伝える

・ 5 日目ＧＷの段取り確認

講義担当長田（当日 ZOOM 参加）：PPT 修正中、テキストは海老原さんのものから変更なし。

・ テキスト状況確認

PPT の表現、誤字脱字を修正している。当日は修正した内容の PPT を共有するのでそ

れを使用する。

3・4 日目の小扉タイトル「リアルを体験」追加。

目標追加内容：当事者宅での介助見学・体験を通し、地域で暮らす重度身体障がい者の実際を理解する

・ 来年度スケジュール

8 月～10 月にかけて、継続校、新規実施校が決まっている。

インクルーシブ運動会や、中学校での講義の開催も準備

・ 新カリキュラムについて

2 日目の講義について以下のような形式(案)に変更：岡部に内容確認（本間）

目標

- 実際の事例を通して医療者・介助者目線で当事者を捉える観察の視点を養う
- 事例を通して多職種の視点で物事を捉える重要性を知る
- 当事者の意思を聞くことが重要であるという示唆を得られる
- 対象者について考え、話を聞く準備ができる

構成：

1） 事例紹介

2） 介助者の視点の講義(事例に関連した観察、アセスメントの視点を紹介する)

3） 医療者の視点の講義(事例に関連した観察、アセスメントの視点を紹介する)

4） 当事者、介助者、医療者での座談会を実施する。当事者の声を聴く。

・ テキスト作成スケジュール

4 月 20 日までに目次の作成→4 月末に目次読み合わせ（MTG）→各自修正とテキスト作成(新しく川村が､｢学生ヘルパー経験が現在にどのように活きているか｣部分を担当)

5 月 20 日テキスト作成→5 月末に本文の読み合せを行う（MTG）→各自修正

6 月中にテキストの完成

2. カリキュラム実施結果

作成したカリキュラムを以下の 3 校で実施した。結果報告を記載する。参加した重度身体障がい当事者及び学生のアンケート結果詳細については別途資料を添付する。

帝京平成大学

・ 日時

2021 年 8 月 16 日-8 月 24 日

・ 対象

帝京平成大学ヒューマンケア学部看護学科 1 年生 19 名

・ 見学体験に協力いただいた当事者(五十音順・敬称略)：

伊藤弾,海老原宏美,岡部宏生,小田政利,小田瞳,酒井ひとみ,高野元,安平有希

・ カリキュラム内容

8 月 16 日―8 月 17 日　講義及びグループワーク、コミュニケーション体験

8 月 18 日－8 月 23 日　当事者宅での見学体験 2 日間
8 月 24 日　講義及びグループワーク、発表会

・ 学生向けアンケート結果

回答率 100%(19/19 名)

全ての学生が「カリキュラムは満足できる内容でしたか」の問いに「とてもそう思う」もしくは「そう思う」と回答した。

自由記載では講義の感想について「講義の内容が初めは触れる程度知ってもらう程度のものからしっかりと生活や医療にていて知ってもらうという形になっていて分かりやすかったです。」「今回の講義を受けて、一言では表すことのできない事を学ぶ事ができました。一番印象に残ったものを挙げるならば、「障がいを特別扱いしない」ということです。人それぞれ障がいと感じるものは違うこと、誰にでも障がいはあるということ、こういうことを踏まえ、相手を思いやれる看護師になりたいと強く実感できた 5 日間でした。ありがとうございました！」といったものがあった。また見学体験の感想としては「実際に地域で暮らす人を身近に見て、障がいがある方も楽しく私たちと変わらない生活を送っているということを知れて、障がいに対する考えが変わったので良かったです。」といったものがあった。

横浜リハビリテーション専門学校

・ 日時

2021 年 9 月 21 日-9 月 24 日

・ 対象

横浜リハビリテーション専門学校作業療法学科 2 年生 4 名、理学療法学科 2 年生 3 名

・ 見学体験に協力いただいた当事者(五十音順・敬称略)：

伊藤弾,小田政利,小田瞳,酒井ひとみ,高野元,安平有希

・ カリキュラム内容

9 月 21 日―9 月 22 日　講義及びグループワーク、コミュニケーション体験
9 月 23 日　当事者宅での見学体験
9 月 24 日　講義及びグループワーク、発表会

・ 学生向けアンケート結果

回答率 86%(6/7 名)。

回答した全ての学生が「カリキュラムは満足できる内容でしたか」の問いに「とてもそう思う」と回答した。

自由記載では講義の感想について「当事者、介助者の方々からの生の声を聞くことが出来たのがすごくよかった。人それぞれ意見や思いが違うため、自分で決めつけることはやめようと思った。」といったものがあった。今回は日程の都合上見学体験が 1 日間であったが、「とても短かった」「短かった」と回答した学生が 5 名だった。見学体験の感想は「結論から言うと本当に楽しかったし、来てよかったと心から思っています。コミ

ュニケーションが楽しかったということに加えて、食事や料理、買い物の介助がを通して実際の介助はこんな感じなんだと体験出来て良かったです。」といったものがあった。

東北文化学園大学

- 日時

  2022 年 3 月 28 日-4 月 1 日

- 対象

  東北文化学園大学医療福祉学部看護学科 9 名、リハビリテーション学科理学療法専攻 5 名、作業療法専攻 2 名、言語聴覚専攻 2 名。

- 見学体験に協力いただいた当事者(五十音順・敬称略)：及川智、北舘穂、佐藤順子、長尾有太郎、星山慈良、八乙女優、渡邊晴輝

- カリキュラム内容

  3 月 28 日,29 日　講義及びグループワーク

  3 月 30 日もしくは 31 日映画「風は生きよという」鑑賞、コミュニケーション体験

  3 月 30 日もしくは 31 日当事者宅での見学体験(1 日)

  ４月１日　講義及びグループワーク、発表会

- 学生向けアンケート結果

  回答率 100%(18/18 名)。

  回答した全ての学生が「カリキュラムは満足できる内容でしたか」の問いに「とてもそう思う」と回答した。

  講義の感想については「実際に障がいを持つ方の講義を聞くことができて、本人たちがどのようなことを考え、どのような思いで過ごしているのかを知ることができてとても貴重な体験だった。最初は障がいとはどのようなものなのかはっきり意見が浮かばなかったが、本人たちの考えを本人たちの言葉で聞いて、障がい者に対する自分自身の考えも変わり、よりはっきりしたものになった。」「障がいとは何かについて人生で 1 番考えることが出来ました。」といったものがあった。見学体験の感想は「障がい者の 1 日の過ごし方を実際に見て、私たちのように自由に暮らしている様子を見た。体験がもっと多くできたらよかったが、障がい者とヘルパーや看護師との関係性や動きなどを実際に見ることができて勉強になった。」があった。またその他の意見として「当事者と学生のディベートなどがあればもっと面白く、お互いの気持ちなども深く知ることが出来るのではないかと思いました。」というものがあった。

III. まとめ

作成したカリキュラムは参加した学生や当事者にとって、大変満足度の高い内容だった。また、次年度以降の継続が決定している学校もある。参加した学生は、地域で暮らす重度の身体障がい者の実際を知るだけでなく、障がいそのものの認識を改め、その後の自分自身の行

動変容の機会となっていた。今後は本カリキュラムの開催を全国的に拡大し、対象の年代を大学生だけではなく小学生や幼稚園児にまで広げることを目指している。そのためにはカリキュラムの実施方法を柔軟に組み替えられるように検討し、講師ができる人材の確保と育成、当事者への協力、質を落とさないようにする仕組みづくりなどの課題がある。